

イラン南東部地震

2003(平成15)年12月26日に発生したイラン南東部地震は、イラン南東部のバム市近郊を震央とし、マグニチュード6.5の直下型地震で、バム市とその周辺の地域が甚大な被害を被った。

ほとんどの家が日干しレンガで造られていたため、バム市内の80~90%の建物が倒壊して壊滅状態となり、死者は4万2千人に達した。2000年の歴史を持つ歴史的な遺跡で、世界遺産に登録されている古代の城砦アルゲバムは、石ころの山と化していた。

この地震による被災者の医療救済活動を行うため、日赤は地震発生直後にERU(緊急対応ユニット)を発動した。

ERUとは国際医療救済を使命とす

院長 石川 清
学長 石川 清
学長 石川 清
学長 石川 清

石川 清 30



日赤ERU診療所での診療

初動班の一員として厳冬のバム市へ

る赤十字が、大規模災害時に迅速に対応するため、各国赤十字社に整備している緊急出動可能な専門家チームおよび資機材の総称である。

病院機能を有するERU、診療所機能を有するERUなどがあり、被災地ではそれらが一体となつて、国際赤十字連盟の傘下での救援活動を展開する。

日赤は診療所機能を有するERUを保有しており、テント、医薬品、食料品など総重量7トンの装備で、簡単な手術や保健医療の領域で援助することを目的としている。

日赤ERUの使命は、連盟と連携を取り、ERU派遣国の一員として、ノルウェー、フィンランド、スペインなど各国赤十字とともに、バムの崩壊した医療の補完機能を果たすことである。

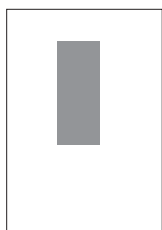
つた。

私はこの日赤ERU初動班の12人の一員として、12月28日に日本を出発した。現地入りしたのは地震発生から4日目で、厳冬のバム市であった。

初動班には救護所の選定・設営、被災状況の把握、現地での交渉など、救護所立ち上げまでの極めて難しい任務がある。予定通りに機材が届かないことや、現地との交渉がうまくいかないなどの難題を乗り越えていかなければならない。大変な分、やりがいのある任務だった。

ERU機材の到着によりERU診療所での本格的な診療活動を開始できたのは、地震発生から1週間後であった。

初動班のメンバーはここで3週間、ERU診療所での診療や被災者キャンプなどへの巡回診療を行った。



低い日本の救護レベル

イランは世界でも有数の地震国で、1990年にも約3万5千人の死者を出した大地震があった。そのため災害対策には万全の体制が出来上がっており、その中心的な役割を担っていたのが「イラン赤新月社」であった。イスラム教国では、宗教的な理由から十字架を使うのを嫌うため、赤新月社という。

イラン赤新月社は全国に7千人の職員と220万人のボランティア、救急車、レスキュー用重機など計3千台の車輛、ヘリコプター、搜索犬も保有し、災害発生時には救援活動の中心的存在となっている。

イラン南東部地震では、発災直後から救護班の派遣、救命重機などの投入に加え、1万人以上の医療救護員を動員し、診療所で4万人以上を診療した。



名古屋第二赤十字病院名誉院長
石川清
愛知医療学院短期大学学長

石川 清 31



われわれが到着した日に帰国したウクライナのチーム

素晴らしい海外の災害対応

がれきから負傷者を救出して各地の病院に搬送し、4万人以上の死者の埋葬を行い、テント、毛布、食糧などの配給も行った。イランの災害対応の素晴らしさに感心した。

また、現地で驚いたのは、私たちが到着した日に、救援活動を終えて帰国したウクライナのグループのことだ。

医師や看護師、救急隊、救助犬など、総勢50人のグループで、彼らは地震発生の当日、軍隊の飛行機で現地に入り、地震発生直後の3日3晩、超急性期の医療救護活動を終えて帰国するところだった。

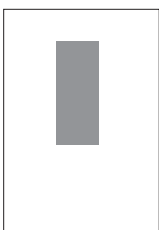
ウクライナのような国に、どうしてこのような迅速な救援活動ができたのか。それは、戦争などの紛争が長く続

いたからだ。平和な国日本の災害救護のレベルは、非常に遅れていると実感した。

各国赤十字のチームは、国際赤十字連盟の下、お互い情報交換を行うとともに一体となって救援活動を行っていた。ここでも赤十字の連携、歴史と伝統の上が出来上がった国際赤十字組織の素晴らしさが印象的だった。

われわれ初動班は約3週間にわたり現地で救援活動を行い、第2班に引き継ぎ、帰国した。現地の医療が復興するにはかなりの時間を要すると予想され、日赤は3カ月間、救援活動を継続した。

現地の状況が落ち着きを見せ始めた3月下旬、イラン人スタッフが引き続き診療活動を継続できるように、ERU（緊急対応ユニット）資機材をすべて引き渡して救援活動を終了した。



スマトラ島沖地震・津波

2004(平成16)年12月26日に発生したインドネシアのスマトラ島沖地震・津波は、マグニチュード9.0の巨大地震で、当時、観測史上4番目の大地震、津波被害は史上最悪と言われた。死者は世界中で22万人にのぼった。

日赤は、震源地に近いムラボで救援活動を行うことになり、私は第2班のチームリーダーとして年明けに現地入りし、約4週間にわたって活動した。

避難民キャンプでの診療と、津波で幹線道路が寸断し、孤立した地域に医療を提供する巡回診療を行った。

この地震で問題になったのは、住民の津波に関する知識の欠如だった。ムラボ在住の通訳も「地震直後、津波が来るのを恐れて、自分は子ども2人を

院長 石川 清
名誉 石川 清
短期 石川 清
病期 石川 清
院大 石川 清
名古 石川 清
屋屋 石川 清
第二 石川 清
赤十 石川 清
十字 石川 清
病院 石川 清
名譽 石川 清
院學 石川 清
學長 石川 清

石川 清 32



後に東日本大震災で見ることになる光景が広がっていた

津波の恐ろしさ後の東日本大震災でも

バイクに乗せて山へ逃げた。しかし、津波のことを知らなかった村人はみんな

こうした教訓は、2011(平成23)

していたからだ。この経験は、衛生状態を良くしておけば感染症は起こらないという教訓を示してくれた。

イランの時もそうだったが、スマトラ島の救援活動でも「ボランティアの存在はなくてはならない」という光景を見せつけられた。

年の東日本大震災の時に日本でも語られ、私はスマトラ島で見たのとまったく同じ光景を目撃することになる。

スマトラ島での救援活動で学んだことはほかにあった。

発災後、WHO(世界保健機関)が「津波被害者に対する水や衛生面の対策を十分に行わなければ、感染症で15万人が死亡する危険性がある」との緊急アピールを出し、現地の人や救援の人たちは震え上がった。

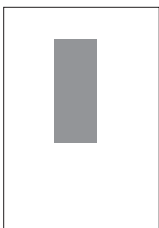
インドネシアにおける赤十字ボランティアの活動は、インドネシア国内から集まった学生を中心に、遺体収集作業が行われていた。非常に過酷な状況下での連日の献身的な活動には、目を見張るものがあった。

被災地の人たちの話を聞いたり、実際の被災現場を見ることによって、津波の恐ろしさ、凄まじさ、津波災害の現実をこの身で体験することができた。

しかし、感染症はまったく起こらなかった。早い時期から、赤十字をはじめとする多くの組織が清潔な水を供給

めとする多くの組織が清潔な水を供給

このことは今後の災害医療を考える上で非常に有益であった。



八事日赤の歴史と伝統

日赤本社で国際救援拠点病院構想が出された時、当時の八事日赤院長の栗山康介先生はいち早く名乗りを上げられ、八事日赤は全国92の赤十字病院のうち、五つの国際救援拠点病院のひとつとなった。2001(平成13)年のことだった。

拠点病院の指定を受けてからは、ホスピタルミッションのひとつである「社会に貢献するモラルの高い病院」を实践する具体的な取り組みとして国際救援が掲げられた。

拠点病院は国際医療救援部を設置し、派遣要員の登録・養成・研修を担当し、度重なる大災害では、病院を挙げて積極的に取り組み、多くの職員を派遣してきた。

国際救援は赤十字の使命であると同

名古屋第二赤十字病院名誉院長
愛知医療学院短期大学学長

石川 清 33



国際救援派遣の出発式(上)と
名古屋駅ホームでの見送り

全国五つの国際救援拠点病院のひとつに

時に、社会に貢献でき、非常にやりがいのある仕事であった。国際救援は八事日赤の歴史と伝統のひとつとなった。

病院が国際救援を積極的に推進するメリットとして、赤十字本来の使命の

実践、優秀な人材の確保、国際救援を希望する職員のモチベーションの向上、病院の高い評価とイメージアップ、その結果としての寄付の増加などがあ

スとなっても、総合的にみれば国際救援は間違いなく病院経営にプラスとなる。

国際救援活動に対してマスコミは非常に好意的で、この報道による宣伝効果は大きかった。

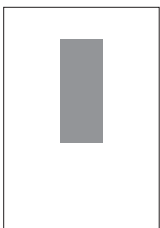
災害や紛争は暗い話題だが、国際救援は病院にとって明るい話題であり、国際救援に職員を派遣する際に

は、その明るい話題を最大限活用してきた。

人が集まる場所での出発式・出迎え式の開催、マスコミへの取材依頼、院内報や病院紹介パンフレットへの掲載、講演・学会での発表など、病院を挙げて国際救援に取り組んでいる姿勢をアピールしてきた。

国際救援を希望する看護師、研修医は多く、それも優秀な人材に見受けられる傾向があった。看護師・研修医確保策として絶好のセールスポイントであり、国際救援は優秀な人材の確保に貢献する。

国際救援は一部の職員だけで取り組むのではなく、全病院挙げて取り組む存在になつてはならない。そのためにも国際救援に関わる人材は病院にとって必要な人材でなければならない。



東日本大震災

2011(平成23)年3月11日に発生した東日本大震災は、2万人近くの犠牲者を出し、自分の生涯の中でおそらく2度と遭遇することのない大災害だろう。

この年の5月、日赤本社で開催された院長会議の席上、私は赤十字病院の院長たちに「これ以上の大災害はない。この大震災で赤十字病院が頑張らなかつたら、赤十字病院の存在意義はない」と強く訴えた。

八事日赤は、震災直後の地震情報から甚大な災害と判断し、直ちに院内災害対策本部を設置し、情報収集、救護班派遣準備を開始した。

全職員に対して緊急院長メッセージで「全病院挙げて救援活動に協力する

院長 石川 清 34
 学長 石川 清 34
 短期大学 石川 清 34
 赤十字病院 石川 清 34
 第二医療 石川 清 34
 名古屋 石川 清 34
 古知 石川 清 34



石川 清 34

ように」と呼びかける一方、震災から3時間後には、初動班の10数人を被災地に派遣した。その後も継続的に救護班を派遣し、8月末までに延べ227

「全病院挙げて救援活動に協力を」

人を被災地に送った。

職員の派遣に当たっては、モチベーションを維持するために毎回、出発式と出迎え式を開催した。さらに、派遣される職員に対しては、出発前にブリーフィングを行い、派遣の目的・心構え・注意点を周知徹底した。また、帰還時には、心の傷を負って帰ってくる職員もいるため、心のケアを含めたデブリーフィングを行った。

被災地での救護班の活動は、救護所での医療活動、巡回診療、避難所でのケアチームの活動などであった。私自身も震災から11日後、救護班

の一員として救護活動に参加した。現地に入り、実際に自分の目で見た被災地の印象は、テレビや新聞の報道とはまったく異なり、津波の凄まじさを体感した。この時の印象は、阪神淡路大震災の時と同じであり、被災者の人たちから涙を流して感謝されたこと

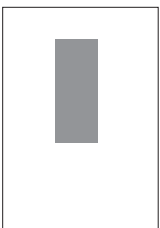
は大きなやりがいであった。

院長として職員を積極的に派遣した理由は、第一には被災者支援が目的だが、救護活動を通して自分の目で被災地を見ておくことは、来るべき南海トラフ地震に対する心構えをする上でも大きな意義があるからだ。

さらには、救護班として直接被災者に関わることは、医療従事者としてやりがいを感じることであり、1人でも多くの職員がこの経験を共有できることを強く切望したからだった。



地震発生から3時間後に救護班を派遣



石巻日赤の奮闘

東日本大震災の震災直後から八事日赤が全病院を挙げて支援したのは、石巻赤十字病院（以下、石巻日赤）での救援活動で、震災当日から8月末までに総勢227人の職員を派遣した。

石巻地区では、10近くの病院のうちほとんどの病院が津波で壊滅状態となり、診療機能を失ったのに対して、石巻日赤は機能を失わず、この地域の災害拠点病院としての役割を十二分に果たした。

石巻日赤は震災の5年前に海岸線から約5キロの地に新築移転し、その際、災害拠点病院としての機能を充実させた。建物は免震構造で、利便性のあるヘリポート、広大な地下倉庫スペースなどを有し、災害拠点病院として理想的なハードを備えた。

名古屋第二赤十字病院名誉院長
石川清 35
愛知医療学院短期大学学長



石川 清 35



東日本大震災被災地での八事日赤のスタッフ（右端が筆者）

ソフト面についても、この地区で99%の確率で発生すると予測されていた宮城県沖地震に備え、日頃から頻繁に災害訓練を実施し、いざという時のために備えていた。

モデルケースとなる救援活動

に備えていた。

震災直後、全職員は院内で万全の態勢を整え、押し寄せてくる傷病者に対応した。職員の中には家族を亡くしたり、家を流されて住まいがなくなったりもかわらず、病院に留まり、医療従事者としての使命を果たした職員が何人かいた。

この石巻日赤の職員の献身的な行動は、医療従事者として模範となるものであった。

さらに注目すべきは、県知事から災害医療コーディネーターとして委嘱されていた石井正先生の活躍だった。

石井先生を中心に、全国から集まった救護班は一括管理され、効率的に配置する体制ができ上がり、石巻地区にあった300力以上の避難所の診療をはじめ、石巻地区の住民約22万人の医療を担う受け皿となった。

私を含め、八事日赤の職員が石井先生をサポートできたことは幸運であった。

全国から集まった救護班は延べ約3600チーム、1万5千人に及び、これらの救護班をうまくマネジメントし、石巻地区の医療が一元的に管理されたことは、それまでに例を見ない活動だった。

この石巻日赤で展開された災害対応は、来るべき南海トラフ地震に対して、非常に参考となるモデルケースであり、この大震災で学んだ貴重な教訓となった。

